

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.14
平成9年11月1日



再び連盟の使命について

会長 新堀 豊彦

横浜能楽連盟は、昭和二十三年七月十一日、「横浜能楽謡曲連盟」の名称で発足してから、明・平成十年で五十周年を迎えることになりました。

戦後の混乱期において、いち早く同好の士が集い、横浜における明治・大正・昭和を通じてこの能楽謡曲の伝統を継承し、今日までゆるぎない発展の道程を創り上げられた先達に対して深く敬意と感謝の気持ちを抱けると共に、現在も御協力を賜わり、横浜能楽堂を中心とする五流の結束が、まさに全国一の組織力をもった連盟に成長しつつあることを、心からこの機会に御礼申し上げます。

本連盟は、能楽謡曲愛好者の総合的な団体（面うちの方々ま

で包含する）として活動しているユニークな存在であります。

「能」そのものが、現在、空前のブーム状態にあり、「能」を見る方の数は大変多くなっていることは間違いありませんし、関心と理解が広がっております。

とも確かですが、自ら謡い舞うことを楽しむ層は、前号でも指摘した通り、それ程普及しているとは思われません。むしろ、若い方々の入門は減少気味であることを憂うるものです。

連盟への個人加盟者は、まずその問題に取り組み、二十世紀へむけて後継者づくりに取り組む義務があると思います。

そして、連盟への加盟者が一人でも多くなり、真の愛好者が増えることにより、日本一の能楽堂が、日本一の利用率を誇るようになるように協力していくことが必要であると考えます。

しかし、能楽堂の舞台を活用するためには、一愛好者、一社中のメンバーだけではなかなか使いきれないはずであります。

各流がグループ化し、組織をつくり、能楽堂を自己研修と発

表の場として利用することが求められるわけで、連盟はまさにそのタバネの役割を果しているのではないのでしょうか。

五十周年を期して、従来の五流大会に加えて、新人・入門者を中心に五流交流会を開催することにしたのも、松舞台で謡い舞うことの門戸を、少しでも広げようとするための前進だと考えます。

連盟に加盟して頂く方が多くなればなるほど、横浜能楽堂との共存共栄がはかられ、私たち自身への、目に見えない大きな利益が帰って来ることを期待したいのです。

何流でも結構です。一人でも多くの入門者を増やし、その方々が将来、舞台で演ずることのチャンスをも、少しでも多くすること、それは又、私たち自身の舞台への欲求を満足させることにもなるのではないのでしょうか。

謡曲や仕舞に親しみ、稽古をいとわなくなれば、それは直ちに舞台での発表につながるわけでありませぬ。舞台をつとめる回数が増えれば増えるほど、技術はあがり、面白さも深まっています。これは、経験者は誰しも知っていることです。

連盟は、まさに五流全体のそうした窓口として機能し、その参加者に広く能楽・謡曲へのよ

り深いつながりをつける媒体としての存在に、大きな価値を求めるものです。

現在、稽古はしていなくても能楽に関心のある一般の方の出入会も心から歓迎いたします。

第十三回五流合同

横浜謡曲大会を終えて

常務理事 鈴木 力雄

去る六月七日、能楽連盟の定例主催事業である「五流大会」が、昨年に引き続き今年も能楽堂本舞台で開催されました。素謡・連吟・独吟計二十二番、仕舞・舞囃子計十七番、一調・独鼓計三番と各流派盛り沢山の出演で、(観)梅若会を除く各流派とも予定時間を超える状況でした。

能楽堂での大会は今年で二回目です。昨年、当番であった宝生流幹事から説明のあった反省・教訓を踏まえて、当番幹事である観世流としては大会に臨んだのですが、次回に備えての積み重ねとして、主な反省点を述べさせていただきます。

一、「お稽古を共有する素人衆」として、出演者はお互いに演者であると同時に、

観客であって欲しい。自分の出番が終わっても、流派を越えて、見所にいく余裕があつてよいのではないのでしょうか。

二、楽屋を各流派着替えの間としたほか、婦人更衣室として二階の研修室二部屋用意しました。しかし、楽屋は男性の間となってしまう傾向なので、研修室四部屋を各流派婦人更衣室としたほうがよいと思われませぬ。

三、鏡の間、切戸およびその間の通路で、待機あるいは練習中の雑談は、舞台上まで聞こえますので「静粛」の張り紙をしたのですが、



熱演の1コマ

十分ではありませんでした。また、楽屋の戸は出入り以外、常に閉めておく必要があると思います。

四、せっかくの本舞台出演です。それから、お役の方が自ら見台を持って出るのはなく、できれば切戸担当者が見台を舞台に準備するようにしては如何でしょうか。

このほか、事務的な反省点もありませんが、既に理事会で報告済みです。

今大会は、幹事の手違いなどもあり、終了時間が大幅に遅れましたことをお詫び申し上げますとともに、出演者の皆様方、能楽堂職員の方々のご協力に對しまして厚くお礼申し上げます。

能楽連盟創立五十周年

記念行事について

常務理事 望月 悦夫

科学の進歩と激動の二十世紀も、残り八百日余りで暮れようとしています。横浜能楽連盟は、この時代の半世紀を踏み越えて着々と発展し、明年（一九九八）五十周年を迎えます。

当連盟理事会は、半世紀の節目に当り記念事業を企画し、それぞれ準備委員会を発足させました。その一……横浜における能楽に

関する実績を調査し記録として編集・発行

文明開化の最先端を行く横浜に古典芸能の能楽の稽古が始まったのは、明治十六年との記録がある。しかし横浜は大震災と戦災とで戦前の資料は殆ど皆無に等しいが、先送りすれば一層困難になるので、この機会に調べあげ後世に残すことが、現在能楽に携わる者のつとめと、新堀会長は思いを深くしている。その二……五十周年記念五流謡曲大会

平成十年七月十一日(出)、七月十二日(回)の二日間、横浜能楽堂本舞台にて、素人による能四番と舞囃子数番(三役は能楽師)を加えて、例年通り謡曲と仕舞の会を盛大に催す。

その三……第四十六回横浜能生流の「安宅」と喜多流の「隅田川」に、他各流の仕舞又は舞囃子の記念番組を組んで、十一月九日(出)・十一月十日(回)の二日を横浜能楽堂で催す。

その四……横浜五流交流大会 別掲のように五十周年を機に、能楽愛好者の基盤拡大を期待して、毎年二月頃開催する。

以上の五十周年記念行事は連盟役員全員が準備にあたっていますが、会員の皆様からも、多くのご意見やご助言を頂戴して

反映したいと考えています。ご協力をお願い申し上げます。

第一回五流交流大会

開催準備進む

常務理事 鈴木 力雄

前号の会報「幽玄」(第十三号)でご紹介しました横浜能楽連盟の新事業「五流交流大会」が、平成十年二月七日(出)十二時から十七時の間予定通り開催されます。

さる七月十日開催された連盟理事会で、次のスケジュールが幹事担当の鮫梅若会から示され、第一回大会の実施に向けて着々と準備を進めることが決まりました。

八月十五日 各流派あて大会案内状送付

九月十五日 各流派出演曲目申込締切(以後幹事による番組編成作業、番組下刷)

十月十五日 各流派あて番組下刷送付(各流派毎に下刷校正)

十一月十五日 各流派からの校正締切(番組印刷)

十二月十五日 番組および大会運営上の注意事項など各流派あて送付

このスケジュールでは、準備が早すぎるとお思いの方もあらかと思いますが、年末年始一ヶ月は実質的に関係者の足並みが

揃わないことを考慮した結果です。年内には運営の大綱を終了し、年明け後は手直し程度で済まして、大会に臨もうというわけです。

「第一回五流交流大会開催準備進む」とは申ししても、この原稿の締切が九月十五日です。書いてある現在は各流派から、どの程度の申込があるのか、出演メンバーは、曲目は、など一切分かっていません。そして、この原稿が記事となる

「幽玄」十四号が皆様のお手元に届く頃には、大会の番組がほぼ出来上がってしまいますので、広報記事としては間に合わないとの不安があります。しかし、「五流交流大会」が新メンバー参加の場として、十分にその役割を果たしてくれることを願って書いていくところです。

「五流大会」は既に十三回も続き、各流派とも精鋭を出演させる傾向にあります。が、「五流交流大会」は、連盟の会員・非会員を問わず、これまで五流大会に出演したことの無い愛好者を含めて、横浜能楽堂の本舞台を体験される場でありたい。

さらに、そのような「場」のあることが、多くの「見る」だけの人々に、謡ってみたい、舞ってみようという踏み込ませること

になればと期待して行われる連盟の主催事業です。

第一回「五流交流大会」から、この期待が実ることを願うものであります。

桜紀行

高岡 幸彦

私達は昭和十八年所謂「学徒動員」で応召した者である。当時戦争が激しくなり、特に下級将校の不足で、それまではあった、学生が卒業するまで徴兵を延期できた「徴兵延期」の制度が文化系の学校ではなくなり、急遽召集され軍務に服したのである。そして私は海兵団に入団し、翌十九年春に第四期予備学生となった。そして昭和十九年暮れには予備学生を卒業し夫々任地に赴いたのである。その同期生に京都仁和寺の隣、蓮華寺の住職桑田善照師というお坊さんがいた。戦後彼の尽力で四期予備学生全員の悲願で蓮華寺の境内に海軍四期予備学生の記念碑が十五年前に建立された。この記念碑は普通の記念碑とは趣を異にしたもので、その上にはポールがあり、軍艦旗が掲揚出来る様になっており、又、地下には四期予備学生全員、数千人の名前がイロハ順に生死の別なく刻まれている。そして毎年桜

の頃「観桜会」を催し全国から生き残りの者が集まり、ポールに軍艦旗を掲げ、互いの健康を祝し、逝きし友には蓮華寺本堂で桑田善照師を導師として、全員で「般若心経」三巻唱へ供養する事になっている。

本年はこの会は四月八日に催された。京都は全市桜一色で宛ら「熊野」の「四条五条の橋の上」を思わせる光景であった。齡のせい、最近はお奥さんの随伴が多くなり、私も女房を連れて行った。そのため人数は多く「般若心経」を誦経するに堂は一杯で入りきれない状況であった。

夜の宴会も終り、翌日は私共夫婦は吉野を訪れた。吉野は中学生の時、関西旅行で訪れた事がある。それから六十年もたっているのが初めて訪れる様なものだが、その頃の記憶が鮮明に残っており、もう一度訪れたいと思っていた所の一つであった。その時は新緑の頃であり、静かな雰囲気の中で、如意輪堂や京都に向かつて築かれた後醍醐天皇の御陵等案内の人に説明され、遠く南朝の昔を思い浮かべたのであった。

京都から二時間足らずで着いた吉野の駅は昔とは思ってもよぬ人の波であった。駅でタクシーに宿まで頼んだが、それも人が

多く車輛通行止めで行けぬと途中から歩かねばならなかった。宿に着き、近い蔵王堂を見学し、出たところに吉水神社があった。ここは義経、後醍醐天皇、秀吉等の訪れた部屋があり、よく保存されたものと感心した。更に外に出て、その境内から初めて吉野の中千本の桜を望見した。その規模の大きいのに唯、見とれてしまった。

翌十日にはバスで上千本まで登り、それから中千本、下千本と歩いて下ったが、その素晴らしさに疲れも忘れ、足の悪い女房も頑張つて吉野の駅まで約七キロの道程を歩き終えた。桜の頃の吉野はかくも人の集まるのは宜やかなと思つた次第である。

ゴマ節勉強のすすめ

常務理事
喜多流

中島秀次郎

芸というものは充実した気力と体力の土台の上に、長年の修練で体得された知識と技術が表現されて初めて感動を呼ぶもので、恐らく一期一会的なものではないでしょうか。去る二月、日黒の喜多能楽堂で演じられた友枝昭世師の山姥を拝見し、あらためてその感を深くしました。芸道は厳しく、芸術家に不断の努力を要求するもので、人間

国宝の粟谷菊生師が使つておられる「日銭を稼ぐ」というユーモラスな言葉はこの不断の努力を表現したものと思われれます。素人の我々は幸いにしてこの

ような厳しさは要求されません。「下手は下手なり面白や」と楽しんでむの方が大切で、これがまた人生に豊かな色どりを添えてくれます。しかしながら、下手は下手なりといつても少しでもうまくなつた方がよいことは自明の理で、私が提唱したいのは謡本につきもののゴマ節の勉強を積極的にやろうではないかということですよ。

ところでプロは謡本の符号のことをどう考えているのでしょうか。

平成五年に銀座の松屋で観世文庫の展覧会がありました。展示品の中にごく初期の観世宗家が節づけをした謡本が何冊か出ていたことにはびっくりしました。やはり口伝だけではなく立派な指導書が作られていたのです。また、私の手元には家内の大伯父が愛用したもので、大正十年に廿四世観世元滋師が発行された観世流謡本の全集があります。その別冊ともいいうべき解説書には節のことが詳細に説明されています。但し前段には、概略の説明はするけれども

「その極緻妙絳に至つては到底筆紙に現せざるもの多々あり、それは各自、師に依りて傳授を俟つべきものなり」とことわり書きがついています。

喜多流では昭和九年に十四世六平太名人が御子息の実師や高弟の方に節の解説を取りまとめさせておられますが、その緒言の要旨を記すと「近年、謡曲学習者の研究が大分科学的となり人によって謡い方が違うということは受け入れられ難い情勢にある。しかしながら節、扱を一定不易のものとするには芸術の靈動を阻礙するという心配もある。初学の人々の疑惑を除き、安心して吟謡出来るように一つの基準を示すことに止めたい」と述べておられます。

これを私流に解釈すると、謡曲に社会性を持たせるために、一般的な原理を定めて、これを個々の実際のケースに適用させる、いわゆる演繹法的な思考を絶えず念頭に置きつつも、芸術として各人の自由な発想、表現を妨げることのないようにしようと思慮しておられるということだと思ひます。

しかしながら、芸術云々の話はプロでもハイレベルの方の話であつて、通常は殆ど節づけに忠実に謡われております。この

ことは宗家の内弟子の方達の謡い方やラジオのFM放送の素謡を聞けばよく分かります。

昔と違い、現在ではテープが簡単に使えますから、先生のお稽古の際にテープをとらせていただいで繰り返し聞くこと、観能の機会をふやして経験を積むこと、この二つによって観世元滋師の御要請を満たすと共に、ゴマ節の勉強により一般的な謡い方を正確に覚えることが理にかなつた謡の勉強法で、練習時間の少ない私共アマにとつて最良の方法であるとお奨めする次第です。

会員の声

素晴らしい出会い

梅若会
梅宏会

中村 泉美

謡人生五十年、永い道のりを顧みて、音痴に近い私がよく続いたものと思う。知人に勧められての出会いには中国・青島から引き揚げられた観世流(梅若宏)黒川正六師範であった。当時はまだ定まった稽古場所もなく、神社・寺院の一室を借りて行われており、偶に無断欠席のときであっても、温かな姿であったことが思い出される。

仄聞するところによれば、横浜能楽連盟が創立されてから、

早くも五十年を迎えられたという。能楽五流各会派に属する方々が一致結束、連盟の護持発展に限りない情熱を持って真摯な活動を続けられ、加うるに市民各界各層の支援とが相俟って今日の姿があるものと思えます。とりわけ平成八年には待望久しい横浜能楽堂の建設を完成され、しかもこの能楽堂は明治八年、元加賀十三代藩主前田斎泰公により建立され、次いで大正八年に松平頼寿伯爵に移築されていた、歴史的にも大変貴重な建造物として市の誇り得る施設の一つといえる。

終りに、梅若能楽学院会館控の間の謡曲十五徳と題する掲額の文言こそ、斯道を嗜む者のまさに徳義そのものであろう。

- 不行而知名所
- 不習而識歌道
- 無友而慰閑居
- 不思而昇座上
- 無旅而得知人
- 不詠而望花月
- 無業而散鬱氣
- 不悟而知佛道
- 不望而交高位
- 不老而知古事
- 不馴而近武芸
- 不誘而得神得
- 不意而適養生
- 不想而懷美人
- 不行而知戰場

(出典不詳)

第十回横浜宝生流連合会 大会開催について

横浜宝生流連合会
幹 事 石渡順之佐

去る八月二十三日、新装の横浜能楽堂に於て、「第十回横浜宝生流連合会大会」が行われた。その内容は、素謡二十三番、仕舞十二番、一調二番と、盛り沢山なプログラムでした。参加者は、二十社中、及び個人で参加の連合会々員四十九名、会員以外の囑託会の方々、更には職分の高橋章先生、塚田光太郎先生、大坪喜美雄先生、前田親子先生の四師をお願い致しまして、仕舞や素謡の地頭を勤めて頂きました。各番組共余りの熱演のため、大分終演時刻が遅延してしまいました。最後に四先生の番外仕舞を拝見し、プロの芸に大いに堪能致しました。終了後の懇親会も、能楽堂二階のレストラン「舞」にて行ない、和氣藹々の中に大いに盛り上がり、明年を期した次第です。そもそも横浜宝生流連合会は、スタートが戦後間もなくと聞いております。昭和二十七年十一月「横浜宝生流謡曲大会」のプログラムをお持ちの方がおり驚きました。途中昭和三十年代から大きく途絶えていたものと同じっております。十年前に復活さ

れ、ここに盛大な大会を催すことが出来たのは、正に先輩各位のご努力、更には会員、流友の皆様のお陰と感謝申し上げる次第です。

現在は、横浜市及び周辺都市にお住まいの、同好の方々により会員は百二十名おります。初心者から、教授囑託免状をお持ちの方まで、男子七十五名、女子四十五名、年令は平均六十才をやや越えている位です。月例会と称して、毎月一回(原則として第三土曜日午後)横浜市技能文化会館和室にて、素謡四番のお習会をしております。シテ番のみ、申告により予め決めておき、他のお役は当日抽選で決めていきます。地頭は囑託の方にお願いしております。毎回三十名以上が出席されています。

時節柄の家庭事情で、家では余り大声を出すわけにもいかず、月例会で四番謡い上げ、ストレスを排除し、健康保持に大いに効果が上がっているものと思えます。こうした月例会の集大成として、毎年八月大会を行うわけで、また来年に向けて大いに楽しく勉強を続けて行きたいと思えます。



横浜能楽堂では、以下の通り

公演、講座を開催します。

- 「第五回定期公演」十二月二十日(土)午後二時。狂言「纏緇」(大蔵) 山本則直、能「鉢木」(金剛) 豊嶋訓三。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。十一月十六日(日)から発売。
- 「第三回特別公演」一月二十四日(土)午後二時。能「嵐山」(喜多) 塩津哲生、狂言「素袍落」(大蔵) 茂山千五郎、能「巴」(喜多) 友枝昭世。正面五千元、脇正面三千五百円、中正面・二階三千円。十二月十四日(日)から発売。

- 「第六回定期公演」二月十四日(土)午後二時。狂言「膏葉練」(和泉) 三宅右近、能「清経」(観世) 梅若万紀夫。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。一月十八日(日)から発売。
- 「第八回普及公演」三月七日(土)午後二時。狂言「佐渡狐」(大蔵) 善竹十郎、能「千手」(玉生) 大坪喜美雄。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。二月一日(日)から発売。

「講座・人間国宝に聞く昭和能楽史②」二月八日(日)午後二時。狂言方大蔵流・茂山千作さんを招き、山崎有一郎館長と昭和能楽史を中心に、様々な話を語ってもらおう。司会はNHKの山田

亜樹アナウンサー。チケット千円、全席自由。十二月七日(日)から発売。

いずれも午後二時から会場。電話予約は午後二時三十分から。電話予約(二六三)三〇五五、問い合わせ(二六三)三〇五〇。

編集後記

前号「幽玄」に能楽連盟初期の資料や情報の提供を呼びかけました。連盟常務理事の副島さんを通じて、金春流々友の塚本明様から連盟発足第一号(昭和二十三年十一月十日)、第二号の会報や「謡曲コンクール参加規定」等、貴重な資料のご提供があり深甚の感謝と共に、当時の会報の見事な記事に感心させられました。いずれこれらの貴重な資料は、来年特別企画で発行される「横浜における能楽の歴史(仮称)」にて皆様にお届けすることとなります。(M記)

横浜能楽連盟 連絡先

- 文書郵送又はFAXの場合
〒233横浜市港南区丸山台二丁目二九一-一七 新堀方
FAX 〇四五-八四四-二九〇三
- 電話の場合
横浜能楽堂 佐藤正美
TEL 〇四五-二六三-三〇五〇